

創刊  
準備号  
8

2017年6月19日発行

福祉と介護のミニコミ誌

# ふいねーず



(画 amor amigo)

## Topic

特別寄稿 小規模多機能ホームと地域善隣事業  
連載 心地よい関係性のバランス  
私の子育て奮闘記  
Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

特別寄稿

## 小規模多機能ホーム と地域善隣事業

柴田 範子

(1) ひつじ雲のこれまでの取り組み

特定非営利活動法人樂を設立し、平成29年4月で14年目を迎える。認知症デイサービスから小規模多機能型居宅介護に移行したのは制度誕生後すぐであった。小規模多機能型居宅介護について、ご家族へ説明すればするほど、デイサービスから移行してほしいという声は強かった。迷うことなく始めた小規模多機能型居宅介護だが、あれから10年が経過、現在も基本となる考え方は変わっていないが、運営推進会議等で「こんな風にしてもらえるといいな」とい

うご家族の声とともに「お年寄りはどういうことを希望しているのではないか」「そうすることで以前の暮らしぶりに少しずつ近づけるのではないか」等、ケアにかかわる自分たちがお年寄りの立場にたつて考え取り組んできた経緯もある。縁をもつ高齢者の方々との出会いから人生の最期の場面までにかかわる中で、お年寄り自身から、ご家族から「生ききる」ということを学ばせてもらい、取り組み方を少しずつ変えてきた経緯がある。

地域との関係性を密にできないか、もう少し、事業所が地域のお役に立てないかを模索してきた数年間があった。介護事業者は儲けるために始めていると発言する町内会の役員の声、認知症と世間知られるのは嫌なことだと思われる地域のご家族とも繋がることのできなかつた数年間。近所の方々との縁をどのように作るか考え、9年前に食事を始めた。初回は町内会の役員が冷やかしかし半分で食事会に参加してもらっていたが、以降、近隣のお年寄りたちに

参加を勧めてくれる方々に変わっていった。食事会の始めの頃から、近隣の方々同士が、料理を食べながら会話が途切れず賑やかで、楽しんでいることが役員の方々に理解してもらえたようだった。そして、健康でいられるためにと、管理栄養士、歯科衛生士、調理メン



バー等がボランティアとして素晴らしいチームを作ってくれた。よく噛んで食べられる口にいるようにと楽しい講話と体操を取り入れた歯科衛生士、その季節に応じたメニューを取り入れ、しかも、自宅で簡単にでき、体に良いメニューの作り方を紹介してくれる管理栄養士、そして、調理メンバーは自身の腕も上がると協力的に食事会は回を重ねた。

参加者は一時固定化したが、事業所の職員たちが近隣へのポスティングを継続し、参加する方が増えた。食事会の始まり当初は、食事は近くに小さな一部屋を借りて食事作りをしてきた。そんな状況を近所の町内会長が知り、町内会長が管理する一軒家を低家賃で貸してくれた。一階で食事作りやボランティアが開催するお茶会、二階には事業所に入らない家具等を保管する場所、打ち合わせの場所として活用している。

町内会や民生委員等の近隣住民とかかわることが多くなり、若手が少なくなつた祭りの手伝いをすることになった。依頼されて7

年。男性職員のほとんどが神輿づくりから担ぎ手として地域の一人となつて活躍している。

現在も管理者は地域の女性消防団に加入し、若手男性職員は体育指導員として参加している。

9年間借りていた事業所の狭い風呂場では、浴槽に浸かることができない重度の方々がおり、職員たちも気にかけていた。地域の方々と会話をする機会が多くなり「ひつじ雲さんに銭湯を貸してあげたら」と銭湯のオーナーに声をかけてくれた方がいた。午後の銭湯が開くまでの時間を使って利用させてもらうことになる。下肢筋力の低下しているお年寄りが多



かったことから、私たちはポータブルトイレを持参。次回、銭湯を借りた際に、トイレが和式便座から洋式便座に変わっていた。オーナーの取り計らいに嬉しく思った。

普段、シャワーしか利用できなかったお年寄りの表情、呼吸が楽になり、腕などの可動域も若干の変化に繋がることがわかった。スイカをもつてご主人に会いに来た奥様は、うれしくて涙を流した。事業所が次に広い場所に転居した際は、ご主人が浴槽に入れるようにすると理事長がその場で奥様と約束したらしい。

開設当初から使用していた一軒家の事業所は、東北の震災で壁に亀裂が入ったり、引き戸が外れたりした。家主とも話し合い、次の居場所を探すことにした。近隣の方々に情報提供をお願いし、数日間で数件の情報をいただくことができた。その中で、コンビニを1か月後に閉めるというオーナーに会い即決してもらえた。早いもので転居して4年目を迎えることになる。奥様と約束した風呂場はお

年寄りたちの好きな場所の一つになつているし、職員の腰痛予防にも繋がっている優れたモノである。NPO法人楽は早い出会いから自宅でも最期を迎えるまでの縁を大切にしてきた。

昨年も7人の利用者が自宅で静かに最期を迎えた。しかし、振り返ってみると「ここにいたい」と発言している利用者本人の意向を尊重できず、施設入所に至った利用者も少なくない。どのような思いで一日一日を過ごし最期を迎えたであろうかと考えることがある。

日々の取り組みで大切にしていることは、利用者本人の声を大切にしつつ、家族にも思いを語ってもらい受け止めることである。そのような時間をもち事業所との関係性ができる、自宅で最期を選択する介護者が増えてきたことは間違いなく。約1年かけて、ある利用者の生活を継続して記録し、それを映像化した。

数年前から施設ではない生活の場がNPO法人楽にも必要かもしれないと思うようになってい

た。

## (2) 地域善隣事業の取り組み

3年前、川崎市の健康福祉局から電話があつた。「川崎市としての地域の善隣事業を受託しようと思う。民間にできたら取り組んでみてほしいと思つているがどうだろうか」という内容の話だった。考えていたことが実現できるかもしれないと承諾した。

受託後、市の担当部署の職員と地域善隣事業の説明に回らせてもらった。区役所の担当職員に、民生委員の役員会の会議日に説明できる時間を調整してもらうが、説明の場では民生委員と類似する業務をなぜ市は民間にさせるのかと怒りをあらわにされる場面があつた。町内会会長会、地域包括支援センター等、他の方々への説明会でも同様、調整に時間がかかり、説明の場だけでは理解を得られる状況ではなかつた。区内の複数の不動産会社を訪問し、取り組みの内容を説明させてもらったが理解していただくには時間が必要だと肌で感じた。

最初に住まいが必要だという理由で出会った方は、80歳代の男性であった。ある地域包括支援センターを訪問し、説明させてもらうために約束の時間に伺ったときのことである。職員が住まいの相談を受けているが、その取り組み方法がわからず聴くことだけに数か月を費やしてきたという。相談者

待っているから」の言葉を聞き「申し訳ありません。随分お世話になりましたが、やはり郷里へ帰ります」という言葉を残して郷里へ帰った。住宅紹介だけではない地域善隣事業の奥深さ、難しさを「本人にとつての幸せは何なのか」を最初に出会った高齢者から考えさせられた。

なったようだ」と病院から連絡を受けた。本人の部屋に訪問すると荒れていた。職場と病院の距離があり3時間の透析ができていない。一時、休職をして体調を観ることにしたが、復帰は難しく、病院と住まいとの行き来の毎日。大通りで倒れているところを歩行者が救急車を呼び搬送された。警察から

崎は横浜より家賃が高いという一般相場だが、地元の不動産業者と顔見知りになり、地域善隣事業は入居後も定期的に訪問し、相談や生活支援を行うことで、不動産会社の方々がリスクと考えることは避けられることを伝えてきた。理解してもらえない不動産会社も増えて、アパートの紹介をしてもらうことは難しくはなくなった。4畳半や6畳一部屋のアパートは避ける。風の通らない、風呂やシャワーのないアパートは避ける。生活の質を担保するための最低限の条件であると考え行動してきた。

である80代の男性の相談を、知り合いの不動産会社の社長とともに聞くとところから始めた。結果、現在住む大家との関係性悪化で転居の必要性が高い方であったため、引越すこととなった。高齢者が単独でアパート探しをする場合、そのハードルが高く、転居に至るまで紆余曲折ある。地域善隣事業に理解のある不動産会社と出会い、アパートを探すことは困難ではなかったが、その後のかわりものなかでも本人の目標のようなものが見えてこない。何度も親身になって話しを聞くと、故郷への思いを強く持っていることがわかり、何十年と連絡していない故郷に住む身内の電話番号を記憶していた。「叔父さん、帰ってきてよ。

2人目に出会った方は50歳代の男性。都内に住み、派遣職員として川崎で週3回透析を受けながらの通勤は相当堪えるようであった。透析を受けている病院からの相談で住まい探しが始まった。本人がどのような暮らしをしたいのかを聞きながらの住まい相談。事業所が緊急連絡人となり様々な対応をすることにした。週3回の透析後の体調はだるさが残り、環境整備にまで手が回らないのが現実。病院と連携して自室にも訪問。それによって、体調等の予測ができた。一時体調が良く、本人は川崎から少し離れた大手企業に本採用された。半年が過ぎた頃から、体調不良が原因で仕事を休むことが多く

急車を呼び搬送された。警察から事業所に連絡を受け、病院での付き添いを始める。体調不良から仕事を離れている現状、残る預貯金で生活をしているが、病院と縁が切れることはなく、いずれ、生活保護の申請等も必要になると予測している。そして、将来的には単なる生活支援では収まらない生活に向かっていると思われる。生活支援と病院と連携しながら相談を受け続けることの必要性を感じ取り組んでいる。

生活の質の安心・安定につなげるためには、家賃の高い川崎周辺であつても暮らしやすさ(風通し、広さ)は譲れないと考えている。以降、住まい紹介・生活支援に関しては、相談に力を入れ、それを受けて住まい探しに奔走する。川

(つづく)



## 心地よい関係性のバランス

第20回 クールな献身さ

頼られることに臆病になってい  
る。再び繰り返すことを恐れてい  
る。まだまだ自分に自信がないの  
だ。

子どもの頃、友人同士のトラブ  
ルの話を、「どうしていつも私の  
周りにはトラブルばかり起こるん  
だろう」とうんざりしながら母に  
言うと、「あんたに問題があるん  
じゃないの」と涼しい顔で返事を  
されたことがある。実はかなり  
シヨックだった。シヨックの理由  
は、子どもの私にはうまく説明で  
きなかった。もちろん、ただ「た  
いへんね」と言ってほしかったわ  
けだから、失望したのは言うまで  
もない。しかし、この言葉は何年  
たつてもずっと心に引っかかって  
いた。大人になって、わかったこ  
とだが、あのシヨックは凶星の  
シヨックだったのだ。

子どもの頃から、人に頼られる  
のが好きだった。あの時代の長  
女というものは、たいていそのよ

うにしつけられたし、そのことに  
疑問をもつ人もあまりいなかった  
ように思う。私はすぐにその役目  
を身につけ、頼られることに熱中  
した。だからきつと、友人たちの  
トラブルにも積極的に介入し、な  
んとか解決しようと努力してい  
た。頼られないポジショ  
ンは、どうにも居心地が悪かった。  
だから、そういう場は避けるか、  
あるいは、何とかして頼られるポ  
ジションをゲットしようと努力し  
た。そして、ついには社会福祉学  
科に進学し、福祉の仕事にたどり  
着いた。

福祉の仕事はまるで天職である  
かのようなだった。人の頼りにな  
りたい私と、人に頼らなければ生活  
が困難な状況にある人との出会い  
は、一目ぼれで恋におちた恋人同  
士のようだった。私は、頼られる  
ことにますますのめりこんでいっ  
た。少しでも頼りにされそうな案  
件があると、自分から吸い寄せら

れるように近づいていったし、誰  
もが嫌がるような仕事でも、とき  
には喜んで引き受けた。頼りにさ  
れるためだったら、食事も抜いた  
し、休みもつぶした。サービス残  
業なんて、喜び以外の何ものでも  
なかった。

この喜びの日々にはピリオドを打  
たざるを得なくなったのは、結婚  
がきっかけだった。これまで、少  
なくとも私の周囲の人たちは全員  
が喜んでくれた私の働き方に、喜  
ばない人が現れたからだ。そして、  
初めて自分がすでに正常の域を超  
えていることに気づいた。

パチンコやアルコールや買い物  
など、世の中には通常の範囲では  
無害なものが、度を越えると病的  
になってしまう対象はたくさんあ  
る。仕事に依存するのも病気だが、  
私が依存していたのは、依存され  
るといふ関係性だった。福祉の仕  
事をする人によくあることだが、  
私も例外ではなかった。むしろ重  
症だったかもしれない。この病気  
のおそろしいところは、依存され  
たいあまりに、無意識のうちに相  
手の自立を阻むところにある。こ

のことに気づいたとき、あまりの  
恐怖に愕然とした。相手のためが  
実は自分のためで、自分のために  
相手を犠牲にしている…。相手を  
犠牲にするために、自分が犠牲を  
払っている??? 認めたくない  
事実を目の前にして、しばらくど  
うしていいかわからなかった。母  
の言葉がよみがえった。「あんた  
に問題があるんじゃないの」。そ  
のとおりだった。

アルコールに依存している人の  
目の前に、一升瓶を置いたまま治  
癒を目指すのが困難なように、依  
存されることに依存している人の  
目の前に、頼ってくる人を座らせ  
たまま治癒を目指すのは本当に困  
難なことだと思う。しかし、現実  
はそうやって抱え込む人が重宝さ  
れ、その人の心の問題は見逃され  
てしまうように思う。

あれからずいぶん時間が経っ  
て、少しは自分のメンテナン스가  
うまくなったように思うけれど、  
実はまだまだ自信がない。福祉の  
現場では、いつの時代もよい意味  
で献身的な人が切望されている。  
でも、そういう人たちが、心のバ

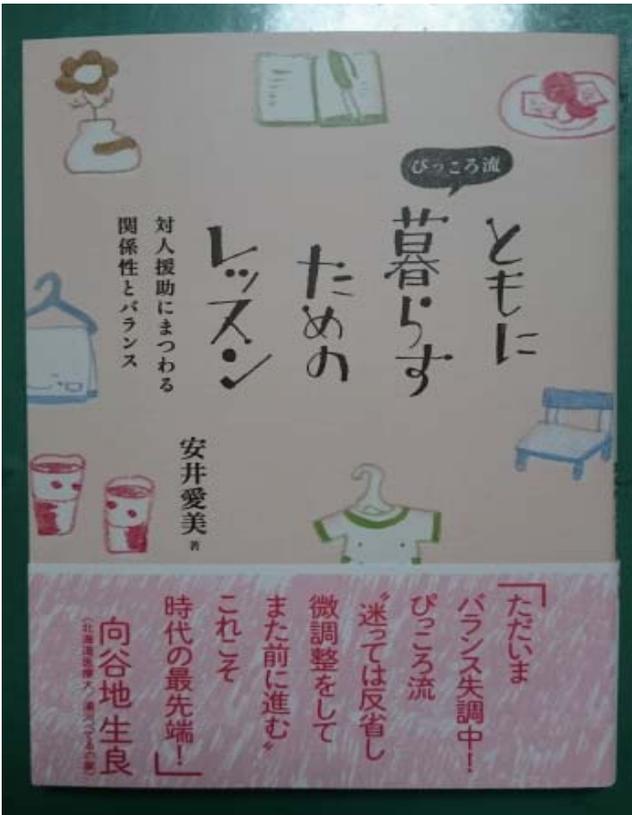
ランスを失わないで働くことはとても難しいと思う。ビジネスライクでクールな人では、どうにも安心できないという感覚が根強いが、本当はプロとして、クールな献身さを身に着けなければならぬのだと思う。

※この原稿は、Juntos (フントス) C L C 発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

## 大友愛美 (おおともよしみ)

北海道生まれ北海道育ち、生粋の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者人所施設では地域と施設をつなぐコミュニティワーカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。

最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場(学校や研修)での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違っていても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ばなければなく、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれない…。と感じている今日この頃です。



『びっころ流 とともに暮らすためのレッスン』  
〈1,600円+税 絶賛販売中〉  
※お求めになりたい方は、当法人までご連絡ください。

## 私の子育て奮闘記

仕事で認知症の方と携わることになった。仕事といっても今までのようなフルタイムではなく、週2日のパートタイム。子供たちの家庭療育と学校サポートの合間にできる週2日の仕事を探していたら、認知症ケアの現場とご縁があった。

認知症ケアは子供たちの発達とは違うものだが、私にとっては週2日だけでもその職場に通い、さまざまな経験をさせていただいたことで、たくさんのおつききを得ることが出来て、とても大切な時間となった。

そこでは入所されている方たちとの関わりを大切にしている、ご本人の思い出の場所と一緒にいく企画をしたり、ご本人が好きなものを食べに行く企画をしたりということも関わりの一つとして行っていた。例えば、その方の生まれ育った場所にお出かけをするという企画をすると、スタッフが共有して、声掛けやサポートの仕方等がそれを意識したものに変わって

いく。そうすると今までできないと思っていたことが出来たり、出かけた場面では普段見られないような積極的な生活動作が見られたり。そんな姿を何人か見せていただいた。

これまでの私の認知症の方々のイメージが乏しすぎたのだと思うが、認知症になってもまた新たな生活にかかわる動作を身につけたりすることもできる方もいて、周りの人たちの関わりでこんなにも変化していくことができるのだと知りとても新鮮だった。

発達育児とはつながらない話に聞こえるかもしれないが、私の中では、その方々の姿を目の当たりにして、希望を感じた。医療的なことは勉強不足だが、大げさに言えば人の脳の可能性を目の当たりにしたというか。でも、そんな大それたことではなく、認知症になつたからできないなどと決めつけているのではなく、無理だと思わずにやる方向でモノゴトを考えていくことで、様々な可能性が広がっていくこともあるんだなと思つた。だからこそ、発達育児も無理

6月10日までに、編集部へ届いた情報です。詳細は、各情報の連絡先にお問い合わせください。また、情報欄への掲載を希望する方は、編集部までご連絡ください。

《第27回 街CAFE さくら》

【7月の催し物】

「ウクレレハワイアン」

日時：2017年7月16日（日）

13：00～16：00

会場：東金市東金 1060-6

（SUNFLOWER 1F内）

参加費：100円（お茶代）

問い合わせ先：社会福祉法人ゆりの木会内  
認知症カフェ担当 平賀・笠原 (0475-50-8111)

《穂垂るの会》

介護している方々が集まって日々の苦労話等を気軽に本音で話し合う会です。

日時：2017年7月13日（木）

13：30～15：30

会場：ふれあいセンター 2階 創作室

経費：200円（昼食代）

主催・連絡先：穂垂るの会・井上

(090-7171-1701)

《ヨガサロン》

健康管理、仲間づくりにヨガを始めませんか？

旧道の岸本薬局の斜め向かいにある「ありさ」の2階で開催中。

日時：2017年7月19日（水）

問合せ先：ありさ（50-0362）

《中核地域支援センター大会 2017》

日時：2017年7月21日（金）

10：30～12：00

会場：千葉市生涯学習センター

内容：若者たちの見えない困窮を考える  
～『我が事・丸ごとの仕組み  
づくりに向けて』～

定員：300名

問合せ先：中核地域市生活支援センター  
「君津ふくしネット」 - (0439-27-1482)



だと思わずに、やるという方向で  
まずはやってみる、そんなことで  
子供たちの可能性は広がっていく  
のではないかと思った。もちろん、  
落ち込むとそんなふうには思えない  
日もたくさんある。だけど、そんな  
な時前述のおいしいちゃんたちの姿  
をいつも思い出して、じんわりと  
元気になって今日この頃である。  
(おとめ)

お知らせ

東金市東新宿の京葉銀行近くの住宅街に、子どもの学習支援の場が開設されました。

名称は、「学び舎 ゆーすぽーと」。ちば地域生活支援舎が、平成29年度独立行政法人福祉医療機構助成金を受け開設しました。興味のある方はご連絡ください。



自宅のような落ち着いた環境で学習ができます！

平成 29 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

# 学び舎 ゆうすぽーと

私たちは、生活環境や人間関係等に恵まれず、暮らしが困難している又はその恐れのある家庭の子どもに対し、関係機関と連携・協働しながら、子ども自らが、自分の能力を伸ばし、社会で「自律」し「自立」して生きていく力を育み・支援する拠点を開設しました。ぜひ一度おいでください。また、お気軽にご相談ください。お待ちしております。

【営業日・時間】

月曜日・水曜日・金曜日・土曜日  
午後3時～午後7時（※要相談）  
注：夏休み・冬休みは、時間が変更になります。

【利用対象】

小学生・中学生（※高校生は要相談）

【活動概要】

- ①学習支援  
教職員経験者、大学生・院生など学習指導が可能な人材による支援。
- ②社会・生活体験  
職業体験や農業体験、国際交流、文化芸能、スポーツ等の様々な体験・経験を支援
- ③相談支援  
学習・進路・生活環境等の相談支援

【利用方法】

家庭教育相談員・民生児童委員・学校関係・各種相談支援機関・行政機関などからの紹介及びつながりを基本とします。

【料金等】

利用に伴う料金や実費負担はありません。

【実施体制】

- ①コーディネーター（非常勤職員3名）  
※教職員及び福祉関係相談員経験者
- ②ボランティア  
※教員・福祉関係・大学生等



（※東金駅より車で5分、徒歩15分）

【お問い合わせ先】

学び舎 ゆーすぽーと  
〒283-0006 東金市東新宿 1 2 - 2 5  
Tel:0475-86-6543 / Fax:0475-86-6544  
E-mail : usp@vega.ocn.ne.jp  
担当：藤田・中村・今井

【実施団体】

特定非営利活動法人ちば地域生活支援舎  
〒283-0802 千葉県東金市東金 425-2  
Tel:0475-53-3630 / Fax:0475-53-3631  
www.chibasha.com  
担当：太齋（ださい）

【お問い合わせ先】

学び舎 ゆーすぽーと  
東金市東新宿 1 2 - 2 5  
Tel: 0475-86-6543  
Fax: 0475-86-6544  
E-mail : usp@vega.ocn.ne.jp  
担当：藤田・中村・今井

## 休刊のお知らせ

誌面構成の変更のため、「ふれーず」を一時休刊します。次回発行は、平成29年9月19日となります。ご理解とご了解をお願いいたします。



<表紙画 amor amigo さんの紹介>

イスラエルに縁ある夫、ペルーに住んでいた妻、17歳差の夫婦ユニット。山口県萩市で私たちが娘と暮らすのは、毛利の殿様が参勤交代で通ったお成り道に面した築200年の古民家です。そこで、イラスト業と並行しつつ、祖父から注いだ画材屋、重厚な梁が残る古民家BAR、ピタサンド専門店、アート教室などを営んでいます。

発行元：ふれーず編集部  
千葉県東金市東金 425-2（鴉嶺の家内）  
TEL：0475-53-3630  
編集責任者：宮下・太齋  
発行部数：500部

最近のニュースを見ていると「政治」がわからなくなってくる。本当は、社会や地域をよくするため必要なことなのに…。一人ひとりがボランティア活動を通じて、共感と共に、社会や地域を変えていくなさうだ！さあ、ボランティアをしよう (To)